

平成21年産水稻の収穫量について

I 全 国

- 1 平成21年産水稻の作付面積（子実用）は162万1千haで、前年産並みとなった。
- 2 平成21年産水稻の作柄は、北海道では不稔もみの発生に加え、低温傾向で推移したことから登熟不良となったものの、都府県では9月以降おおむね天候に恵まれ登熟はおおむね順調に推移したことから、全国の10a当たり収量は522kg（作況指数98）となった。
- 3 以上の結果、収穫量（子実用）は846万6千tとなった。
また、主食用作付面積に10a当たり収量を乗じた収穫量（主食用）は830万9千tとなった。

II 農業地域別の作柄概況

1 北海道

田植期は平年に比べて1日早かったが、生育は6月上・中旬の低温・日照不足により分けつが抑制され、出穂期は平年に比べ4日遅くなった。

穂数は分けつが抑制されたことからやや少なかったものの、1穂当たりもみ数は6月下旬から7月上旬が総じて高温で経過したこと等から多くなり、全もみ数はやや多くなった。

登熟は、7月中・下旬の低温による不稔もみの発生や、8月後半からの低温傾向により、粒の肥大・充実が抑制され粒重が減少したことから、不良となった。

作柄は、上記に加えて青未熟粒等の発生もあったことから減収となり、主産地の上川、北空知及び南空知地帯の10a当たり収量はそれぞれ461kg（作況指数83）、510kg（同91）、469kg（同89）となり、北海道全体では10a当たり収量475kg（作況指数89）となった。

2 東 北

田植期は、各県でおおむね平年並みとなった。生育は6月上・中旬に低温・日照不足で推移したが、その後6月下旬から7月中旬にかけ気温が平年を上回ったことから回復傾向となり、出穂期は青森県及び秋田県で平年より2日ないし4日遅れた他は平年並みないし1日程度早くなった。

穂数は、生育初期が日照不足傾向であったことから、宮城県及び山形県では平年並みとなった他はやや少ないないし少なくなった。1穂当たりもみ数は補償作用等により平年並みないしやや多くなったことから、全もみ数は穂数減の影響が大きかった岩手県及び福島県でやや少なくなった他は平年並みとなった。

登熟は、7月下旬から8月中旬にかけて低温・日照不足傾向で推移したものの、極端な低温はなく、9月第2半旬以降はおおむね天候に恵まれたことから、各県で平年並みないしやや良となった。

作柄は、青森県が10a当たり収量584kg（作況指数101）、岩手県が534kg（同100）、宮城県が

529kg（同100）、秋田県が567kg（同99）、山形県が594kg（同100）、福島県が541kg（同101）で、東北平均では10 a 当たり収量557kg（作況指数100）となった。

3 北 陸

田植期は、各県でおおむね平年並みとなった。生育は5月下旬から6月上旬にかけての日照不足でやや緩慢となり、6月中・下旬は高温・多照で推移したものの、7月中旬以降は日照不足であったことから、出穂期は新潟県で平年並みであった他は1日ないし2日程度遅くなった。

穂数は、福井県で平年並みとなったものの、他県では初期分げつが抑制されたことからやや少なくなった。1穂当たりもみ数は石川県及び福井県で平年並みであった他は、穂数減の補償作用等によりやや多いないし多くなった。以上のことから全もみ数は富山県でやや多くなり、新潟県及び石川県で平年並み、福井県でやや少なくなった。

登熟は、出穂期前後の日照不足の影響を受け、富山県及び福井県でやや不良となり、新潟県及び石川県では8月中旬以降の日照が確保されたことから、平年並みとなった。

作柄は、新潟県が10 a 当たり収量534kg（作況指数99）、富山県が537kg（同100）、石川県が511kg（同98）、福井県が500kg（同97）で、北陸平均では10 a 当たり収量528kg（作況指数99）となった。

4 関東・東山

田植期は、東京都においては平年に比べ4日程度遅くなったが、他県ではおおむね平年並みとなった。生育は、5月下旬以降日照不足の時期があったことから多くの県で分げつが抑制されたものの、その後生育ステージの早い地域を中心に回復がみられ生育に差が出たことから、出穂期は平年に比べて2日程度遅くないし2日程度早くなった。

穂数は、分げつが抑制されたことから長野県で少なく、他県でもやや少なくなった。1穂当たりもみ数が補償作用等により各都県で平年並みないしやや多くなったものの、穂数減の影響により、全もみ数は各都県でやや少なくなった。

登熟は、千葉県、山梨県及び長野県で平年並み、他県では出穂期以降おおむね天候に恵まれたことから、やや良ないし良となった。

作柄は、茨城県が10 a 当たり収量522kg（作況指数100）、栃木県が543kg（同101）、群馬県が500kg（同101）、埼玉県が497kg（同101）、千葉県が527kg（同99）、東京都が405kg（同99）、神奈川県が498kg（同102）、山梨県が525kg（同96）、長野県が595kg（同96）で、関東・東山平均では10 a 当たり収量531kg（作況指数99）となった。

5 東海及び近畿

田植期は、東海地域及び近畿地域の各府県でおおむね平年並みとなった。生育は、6月上旬の日照不足により一部地域で分げつが抑制されたが、初期生育はおおむね順調で、出穂期は各府県でおおむね平年並みとなった。

穂数は、滋賀県、奈良県及び和歌山県で平年並みとなったものの、他府県では分げつの抑制や7月の日照不足で無効茎が増加したことから、やや少ないないし少なくなった。一穂当たりもみ数は、三重県及び大阪府で補償作用等によりやや多くなったものの、他府県では平年並みにとどまり、和歌山県においてはやや少なくなった。このため、全もみ数は東海地域では三重県が平年並みとなった他はやや少なくなり、近畿地域では滋賀県、大阪府及び奈良県で平年並みだった他はやや少ないないし少なくなった。

登熟は、東海地域では一部で日照不足等の影響を受け、平年並みないしやや不良となった。近畿地域では、和歌山県ではもみ数減の補償作用に加え登熟期の好天でやや良となり、他の府県では平年並みとなった。

作柄は、岐阜県が10 a 当たり収量460kg（作況指数94）、静岡県が503kg（同97）、愛知県が499kg（同98）、三重県が481kg（同96）、滋賀県が512kg（同99）、京都府が486kg（同95）、大阪府が495kg（同100）、兵庫県が493kg（同98）、奈良県が511kg（同100）、和歌山県が491kg（同100）で、東海平均では10 a 当たり収量485kg（作況指数96）、近畿平均では10 a 当たり収量499kg（作況指数98）となった。

6 中国及び四国

田植期は、中国地域では広島県で平年に比べ2日程度遅くなった他は、おおむね平年並みとなった。四国地域では徳島県（普通栽培）で2日程度、高知県（早期栽培）で3日程度早くなった他は、おおむね平年並みとなった。生育は、中国地域では7月の日照不足の影響を受け、岡山県で出穂期が平年に比べ1日、他県では3日ないし4日程度遅くなった。四国地域では、高温傾向で推移した徳島県（普通栽培）で2日程度早くなったものの、他では7月の日照不足により生育が抑制されたことから平年並みないし2日程度遅くなった。

穂数は、中国地域では岡山県で平年並みとなった他は、初期生育における分けつの抑制や日照不足による無効茎の増加により、やや少ないないし少なくなった。四国地域では徳島県（普通栽培）及び高知県（早期栽培）では分けつが旺盛であったことから穂数もやや多くなったが、他は平年並みないしやや少なくなった。1穂当たりもみ数は中国地域の各県では平年並みとなり、四国地域では穂数との補償作用の関係等から徳島県（早期栽培）及び香川県でやや多くなり、徳島県（普通栽培）、愛媛県及び高知県（早期栽培）で平年並み、高知県（普通栽培）ではやや少なくなった。このため、全もみ数は、中国地域では穂数減の影響から平年並みないしやや少なく、四国地域でも穂数を確保した徳島県（普通栽培）及び高知県（早期栽培）でやや多くなった他は平年並みないしやや少なくなった。

登熟は、徳島県（早期栽培及び普通栽培）で出穂後の日照及び気温日較差が平年を下回りやや不良となったものの、他県ではおおむね好天に恵まれ、平年並みないしやや良となった。

作柄は、鳥取県が10 a 当たり収量481kg（作況指数94）、島根県が490kg（同96）、岡山県が537kg（同102）、広島県が521kg（同100）、山口県が499kg（同99）、徳島県が471kg（同99）、香川県が496kg（同99）、愛媛県が494kg（同99）、高知県が470kg（同102）で、中国平均では10 a 当たり収量512kg（作況指数99）、四国平均では10 a 当たり収量483kg（作況指数100）となった。

7 九州

田植期は、福岡県、佐賀県、宮崎県（早期栽培）及び鹿児島県（早期栽培及び普通栽培）で天候に恵まれ平年並みないし2日程度早くなったものの、高温障害を避けるための遅植え指導が行われていることから、他では1日ないし4日程度遅くなった。生育は、早期栽培（宮崎県及び鹿児島県）は5月以降高温に推移したことから、出穂期は平年に比べて1日ないし4日程度早くなった。普通栽培においては一部の地域で7月下旬の低温・日照不足の影響を受け、平年並みないし3日程度遅くなった。

穂数は、早期栽培においては、宮崎県でやや多くなった一方で、鹿児島県では生育初期に低温の影響を受けたことからやや少なくなった。普通期栽培では、6月下旬以降は日照不足で経過したことから分けつが抑制された影響が大きく、やや少ないないし少なくなった。1穂当た

りもみ数は、宮崎県の普通栽培で平年並みであった他は穂数減による補償作用等からやや多いないし多くなったものの、全もみ数は宮崎県(早期栽培)で多く、鹿児島県(早期栽培)で平年並みとなった他はやや少ないないし少なくなった。

登熟は、全もみ数の多かった宮崎県(早期栽培)では平年並みとなったものの、他では出穂期以降の好天に恵まれたこともあり、やや良いし良となった。

作柄は、福岡県が10 a 当たり収量499kg (作況指数100)、佐賀県が527kg (同100)、長崎県が479kg (同101)、熊本県が515kg (同100)、大分県が502kg (同100)、宮崎県が514kg (同104)、鹿児島県が494kg (同103) で、九州平均では10 a 当たり収量506kg (作況指数101) となった。

8 沖 縄

第一期稲は生育期間中の降水量が平年を下回ったことに加え、幼穂形成期に日照不足等の影響を受けたものの、第二期稲についてはおおむね天候に恵まれ、本年は台風の影響がみられなかったことから、県計の10 a 当たり収量は306kg (作況指数99) となった。